

受賞した学業／課外活動の概要

患者の語りを社会に生かす～NPO 活動と医学教育の橋渡し～

医学系研究科博士課程 4 年 香川由美

病や障害とともに生きる人の語りは、当事者だからこそ伝えられる具体性やメッセージ性があるため、同病の患者のピアサポートのためのみならず、患者を支援する医療者のための教育や、学校におけるダイバーシティ教育等にも、今後さらに活用されることが期待されます。一方で、患者や障がい者の立場にある人が自身の病や障害といったごく個人的な体験を人前で語ることは、多くの準備時間や精神的・身体的エネルギー、講演技術を要するため、教育への貢献意欲の高い人であっても時に様々な困難に直面しています。しかしながら、多くは個人に依頼される講演であり、語る活動をする患者や障がい者のための自己研鑽の場やサポート体制は、これまでほとんど見当たりませんでした。

私は1型糖尿病の患者として、患者会活動の延長で体験談を講演する機会をいただくなか、自分自身がこの困難に直面しました。そこで、同じような問題意識を持つ学外の有志と共に NPO 法人を立ち上げ、患者講師の養成と紹介の仕組みを構築しました。疾患や障害を越えたメンバーとの協働のもと、教育機関や製薬企業等において、これまでにがんや脳性麻痺等の 100 名を超える方の講演が実現しました。

また、本学医学部の先生方のご協力により、本学医学部における医師のプロフェッショナルリズム教育の一環として、当 NPO で養成された患者講師の講演を聴く授業が実現しました。数年の活動の蓄積を経て、私は患者の語りを活用した医学生への共感の教育に興味を抱き、博士課程において研究に取り組みました。在学中、医学教育雑誌等に NPO 活動や研究について執筆の機会をいただくと共に、日本ヘルスコミュニケーション学会において発表した演題では優秀演題賞をいただきました。さらに、他大学や行政、製薬企業等からの講演依頼、ならびに朝日新聞を始めとする全国紙や一般誌などからの取材といった活動の発信の機会をいただきました。以上のように、患者の語りを社会に生かすため、本学内外の様々な立場の方々と協働し、NPO 活動と医学教育を橋渡しする活動および研究に励みました。

総長賞受賞決定についてコメント

この度は、このような光栄な賞をいただき、誠にありがとうございます。

進学以前から仲間たちと約 10 年に渡って取り組んできた活動で、在学中、多くの方々に支えていただけてきました。お世話になった方々や仲間たちに受賞のご報告ができることをとても嬉しく思います。

いつも温かくご指導くださいました医療コミュニケーション学分野の先生方、ならびに教室の皆さま、お世話になりました学内外の先生方、そして、NPO 法人患者スピーカーバンクの活動にご協力いただきました皆さま、共に活動してきた仲間たちに心から感謝申し上げます。そして、どんな時も温かく支えてくれた家族、友人たちに心から感謝いたします。この賞は、支えてくださっている皆さまと一緒にいただいた賞だと思っています。

NPO 活動でも研究でも、楽しいことと同じくらい困難もありました。七転び八起き連続でしたが、七回転んでもそれでも八回目も起き上がる原動力となったのは、支えてくださる方々の存在に加えて、NPO で出会えた方々の語りを届けたいという想い、そして、主治医が教えてくれた「恩送り」という言葉です。

大学卒業後、就職とともに私は幼少期から患っていた 1 型糖尿病の血糖コントロールが上手くできなくなり、心身ともに落ち込んで長期的な教育入院をしました。人生を良くするには病気が無くなるしかないと考え、現代の医学では病気を治せない現実の前に八方塞がりになっていました。しかし、病院で出会った医師や看護師、患者会で出会った患者仲間のある関わりのおかげで、次第に自分の体調と向き合うことができるようになりました。「治らない病気があっても、健やかに生きていくことはできる」と思えるようになりました。ある時、主治医に「先生にはどう恩返ししたら良いか分からない」と感謝を伝えると、先生は「私たちに恩返しはしなくていいから、これからの人生で、あなた自身も周りの人も笑顔になれることをして、恩送りしてね」と微笑みました。「恩送り」という言葉が心に響きました。

以来、さまざまな方との出会いがあり、この度総長賞をいただいた活動へと繋がっていきました。今は、これが私に与えられた「恩送り」の道だと思っています。

この度の賞をいただくことを機に、改めて自分の原点を心に刻み、周囲の方々への感謝を胸に、恩送りができる自分となれるようこれからも努力を積み重ねていきたいと思っています。